



ESGと武士道

グッドバンカー
代表取締役社長

筑紫みずえ

企業のE（環境）S（社会）G（ガバナンス）の調査・評価を専門とする投資顧問会社、グッドバンカーを設立してから22年目に入った。昨今、いろいろなメディアでESG投資がとりあげられているが、実は、投資手法としての有効性については、懐疑的な見方も少なくない。しかし、国連のSDGsとのからみで、ESG投資を金融のSDGs版と位置づける流れが出ており、ESG投資のメインストリーム化につながるのではないかと、注目している。しかし、そのことはESG調査・評価が確実に投資成果に結びつくという証明がますます求められるということである。そのため、過去から当社に蓄積された膨大なビッグデータを京都大学などと協同して、E・S・Gの、どのファクターが、どのように企業価値に結びつくかの解析を行っている。

最も難しいと感じるのはG・ガバナンス（企業統治）である。そのため、企業以外に、政府や国際機関、軍隊、NPO、宗教団体など、組織と名のつく全てのもののガバナンスに関する情報を収集することに努めている。

最近、「武士道」を集中的に学習している。実は、グッドバンカー社は日本最大級である、鹿児島県出水市の武家屋敷群のひとつにサテライトオフィスを構えている。実際にオフィスとして使用していく中で、統治階級の武士たちの生活の場が、いかに戦闘を想定した、リスク管理と攻撃の思想で

デザインされているかを、日々感じさせられている。例えば、隠し部屋や女・子どもの逃走ルートが存在、外に対する見晴らしの良さ、また、極めて遠方

からの物音が容易に拾えるのに対して、その反対はないということなどである。いったん戦闘に入れば、全ての武家屋敷の門は閉じられ、全体が要塞と化す。それぞれの家には井戸があり、自給自足を旨としていたので、籠城戦にも強い。今でも、知る人ぞ知る近道や、明らかに道と誤認させ、敵をおびき寄せるためのものであろうと推測される場所が、あちこちに見られる。まさに「治にいて乱を忘れず」という発想であり、それは企業統治の要諦でもあろう。そのため、武士階級の統治の思想としての「武士道」を研究すれば、ESGにおける企業統治評価のヒントが得られるのではないかと、特に薩摩の場合、江戸時代の300年を通して、表面はともかく、内実は徳川幕府に対して、心理的には臨戦状態にあったと推測されるので、ここで「薩摩武士道」を研究することは、意味があるように思うのである。

